

随想

旅先で思うこと

わが国のタマゴ業界が生き残るには

加藤 宏光

旅先で日経新聞を読んだ。

パリのホテルでのことである。

四月十日の一面、三井物産が飼料の供給を受け持ち、中国の畜産と合弁事業を進めるとの話。

以下に記事を引用する。

三井物産は五月を目前に中国の牧農大手、新希望集団（四川省成都市）と中国に飼料原料の調達販売を手がける合弁会社を設立する。中国では経済発展による乳製品や食肉消費の増加に伴い、飼料需要が急増している。配合飼料や畜産を主体に幅広い事業を

展開する新希望集団と手を組み、中国での関連食料、飼料ビジネスを拡大させる。（以下略）

現在、世界経済の牽引車となっている中国への各社の熱い思いは常々実感している。この記事についても、通読する限り

「そうだろうな〜！」
といったものである。

しかし、タマゴという畜産産物に限らずあらゆる製品がどの国においても、生産過剰と需要過多を繰り返しながら成長してきている。三〇年前

からわが国のオハコとなっていたLSI技術をとっても、DRAM製造が韓国に追い上げられ、逆転されたのは一〇年も前だろうか。そして、液晶テレビが韓国に追い上げられ、追い越されようとしている。

ちなみに欧州における液晶テレビは四〇数インチのものが六〜七万円で陳列されている。六〜七年前に数十万円していたものが、韓国を中心とした国々の追い上げと昨年の北京オリンピックを当てにしたの過剰生産で値崩れを起こし、回復不能の状況と云える。

タマゴを取り上げれば、現在やや持ち直している卵価とはいえ、リーマンショックの余波で厳しい経営を強いられ、た採卵業界はこれまで、一〇万羽で一億円の利益を得る程の高卵価をも幾度か経験している。著者の知る歴史をとっても、そうした高卵価とそれに次ぐ過剰生産による低卵価を繰り返しながら発展してきた。わが国と対比して五〇〜三〇年の後ろを走っているフィリピンにおいてですら、日本と同様に高卵価と低卵価のエッグ・サイクルを乗り越えてきたのである。当然これからの

中国の畜産産業でも供給過多による低相場を幾度も経過することであろう。過多となった産物は怒涛のごとく海外へ流れ出るのは必至と思われる。国内におけるコスト競争の比ではあるまい。金物加工工業で成り立っていた三条・燕市が、そこそ安い海外工賃に押されて壊滅的とも言える惨状を呈したのは、昨日とも言える出来事であった。これからの中国、インドの経済発展を見る時、わが産業も他人事ではすまされまい。

今年初めにタイ国を視察した折に、CPが中国に一、〇〇万羽採卵農場進出計画を立てているという情報に接した。ことの真偽は明らかではないが、CPのオーナーが華僑であり、華僑の夢が故郷に花を飾ることであるということを考えれば「宜^{むべ}なるかな」とも思われる。

中国の需要を長期的レベルで考えれば、一、〇〇〇万羽

何するものぞ、とは思うものの、先に述べたエッグ・サイクルを考慮すれば短期的に中国で生産されたタマゴが消費量を大きく超えるフェーズがないとは断じ切れない。オーバーフローしたタマゴがわが国へ向けて流れ込むと、昭和初期にあった^{*}「香港タマゴ事件」の再来も危惧される。

こうした事象を踏まえて、コストを抑えるのは必要であることを認めた上で、日本におけるコスト削減の限界も十分に認識しなければならぬ。

ここ、パリのホテルで朝食を摂った。ビュッフェスタイルで、テーブルにゆで卵（ハードボイルド）があったので、試食した。殻を剥き、二つに割ると卵黄表面が黒ずんでいる。そう、二〜三週間室温で置いたときに経験するあの黒い黄身である。しかし、それが食品として致命的というわけではないのであるから、とりあえずカケラを口に含んだ。味が無い。まるで自分が味

盲になったかのように、味を感じないのである。

この日に立ち寄ったショップの女性店員と話し出す。彼女はこの国に住み着いて七年になるそうである。

「この国のタマゴは、臭くて不味いんです。黄身は黒っぽいし、黄色くないんですよー!」

この言葉がフランスのタマゴの質を如実に現している。他の多くの国でもそうであるように、この国でもタマゴの味にさほどのウェイトを置いていないことが実感される。

わが国のタマゴ業界が生き残るために、欠くことのできない要素がこのポイントである。内需産業としての立地条件を確立するために、日本人だからこそ求めて止まない美味しいタマゴを追い求めること。

同じ日の日経にデパートの生き残り戦略についての記述もあった。

いわく、デパート業界では六兆円代に年商額が落ち込んで

だ現在、戦略の見直しを始めている。地方あるいは売り上げの伸びない店舗においては、これまでの敵であったユニクロ、H&Mと手を組み、年商一、〇〇〇億円に届く基幹店舗ではハイエンドの商品展開でリッチな客層を囲い込むのだそうである…。

※香港タマゴ事件

昭和の初期に香港で生産過剰となったタマゴが日本へ輸出されたそうである。小さくて見栄えがしない商品であったが、二〜三個で国産品一個分の値段で市場に並んだ。このため、国産品の価格が暴落してタマゴ業界が壊滅の危機にさらされた、というトピックス。著者はその詳細を知らないが、この情報は二〇年近くも前に故齋藤虎松翁が養鶏雑誌に連載された随想文に掲載されていた。